

column 3 繊細な弦鳴楽器



これは、楽器を綺麗に響かせるための環境因子についてのお話です。(一般論です)

私(筆者)は、最近作った自分のスタジオ(091 参照)に様々な楽器を常設していますが、その中で、特に管理に気を使うのがピアノ、ヴァイオリンなどの弦鳴楽器です。これらは温度や湿度の影響で音が大きく変化するからです。夏場の湿気によって楽器が湿ると、とたんに重く苦しい音色になってしまいます。冬場の乾燥にも気が抜けません。綺麗に響くからといって油断していると、楽器が乾燥し過ぎて、ひび割れを起こすことがあります。スタジオのフロアや壁の反射、共鳴の具合も、楽器音に大きな影響を及ぼします。どんなに温度や湿度の管理に気を配っても、スタジオ全体が湿気ってしまう雨の日は、重く鈍い音になってしまいます。これらは次の理由からです。弦鳴楽器の発音源は「線状」(弦)なので、空気との接触が小さく、空気中に強い疎密波(音波)を発生させることができません。そこで共鳴板や共鳴胴に弦を張ることで、これらを共鳴させて、空気中により強い疎密波を作り、音を響かせます。(078、092 参照)そしてこれらは厳選された良質の天然木で作られるのですが、良質であるが故、環境の変化に極めて過敏なのです。最高の条件の元では最高の能力を発揮しますが、環境バランスが崩れると、その悪環境に反応して特性も崩れてしまいます。弦が綺麗に振動し、板が綺麗に共鳴し、フロアが綺麗に反射する。この3拍子が揃わないと、決して美しくは鳴ってくれません。

一方、膜鳴、体鳴楽器(打楽器など)や気鳴楽器(管楽器など)は、弦鳴楽器に比べると管理は楽です。もちろん打楽器の木胴、管楽器の木管は天然木で作られますので、環境の変化には敏感ですから、細心の注意が必要です。しかし、これらの楽器は発音源の規模が、弦鳴楽器のそれとは比べられないほど大きくて強いのです。膜鳴楽器は「面状」(膜)の振動です。体鳴楽器ならボディ全体の振動です。そして気鳴楽器は「気柱」(空気の柱)の振動なのです。生まれたばかりの赤ちゃんの、あの大きな鳴き声を思い浮かべれば、発音源としての気柱の振動の強さを想像することは容易です。(管楽器、ヒトの声、オルガンなどは管内、声道内の空気の柱が共鳴することで音が出るので、気鳴楽器の仲間です。053、070、071 など参照)発音源が強ければ、環境の影響も受けにくく、それをコントロールすることも容易です。

そして、これらの特性の違いは、それを演奏する音楽家の心配りの違いとなって現れます。

弱い発音源故に楽器とその環境に気を遣わなくてはならない弦鳴楽器の演奏者には「繊細さ」が、また強い発音源故に、他楽器の演奏者とのバランス(音量や存在感)に気を遣わなくてはならない膜鳴、体鳴、気鳴楽器の演奏者には「協調性」が、それぞれ要求されるのではないのでしょうか。(弦鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、気鳴楽器の分類は 046 参照。)